

桑野塾

桑野塾 検索

<http://deracine.foo.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。どなたでもご参加いただけます。それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

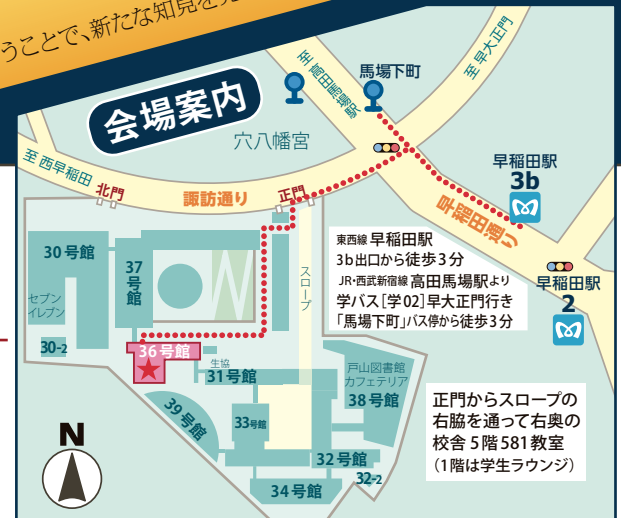
第81回

2024年
9月28日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 戸山キャンパス 36号館 581号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。開場は14:30。
☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(要申込み・飲食費は別途)
※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方は9月25日(水)までにメールでお申込みください。
※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。

参加無料



ダヴィド・オイストラフの初来日 芸術の“鉄のカーテン”が開くとき

報告者：梅津 紀雄



ダヴィド・オイストラフ (Давид Фёдорович Ойстрах 1908-1974)
写真: Oistrakh in 1972 英語版 Wikipedia より
https://en.wikipedia.org/wiki/David_Oistrakh

1955年、ヴァイオリニストのダヴィド・オイストラフがソ連から来訪した。訪日以前から「奇跡の演奏家」として喧伝されていたオイストラフはその期待に十分に答える演奏会を行った。この結果として、日本側はソ連の芸術文化に開眼し、ソ連側は芸術を受け入れる日本の潜在力を理解し、その後の交流の展開の基礎が築かれることになった。

この重要な要因の一つは、もちろん、オイストラフの卓越した技量にあったことは疑いないが、それに加えて、来日のタイミングも絶妙なものであった。彼は戦後ソ連から初めて訪れた音楽家であって、日ソの国交回復を翌年に控えていた。そしてそれはスターリンの死の2年後でもあり、スターリンから遅れて2日後には、日本で多くのヴァイオリン奏者を育てたモジレフスキーも亡くなっていた。

こうした事情を照らし合わせ、定期刊行物やアーカイヴ資料を参照しながら、彼の初来日の意義を改めて検討してみたい。

●梅津 紀雄(うめつ のりお)

1966年福島県生まれ。埼玉大学・工学院大学ほか非常勤講師。表象文化論、日露文化交流史。著書に『ショスタコーヴィチ 揺れる作曲家像と作品解釈』(東洋書店、2006年)、共著に『自叙の迷宮 近代ロシア文化における自伝的言説』(水声社、2018年)、共訳著にフランス・マース『ロシア音楽史 《カマーリンスカヤ》から《パービー・ヤール》まで』(春秋社、2006年)ほか



都体育館での演奏会



CD「オイストラフ ライヴ・イン・ジャパン 1955」
(オクタヴィア・レコード)

●問合せ・懇親会申込み：大島幹雄(おおしま・みきお) E-mail: izj00257@nifty.com 懇親会申込みみ切：7月10日(水)